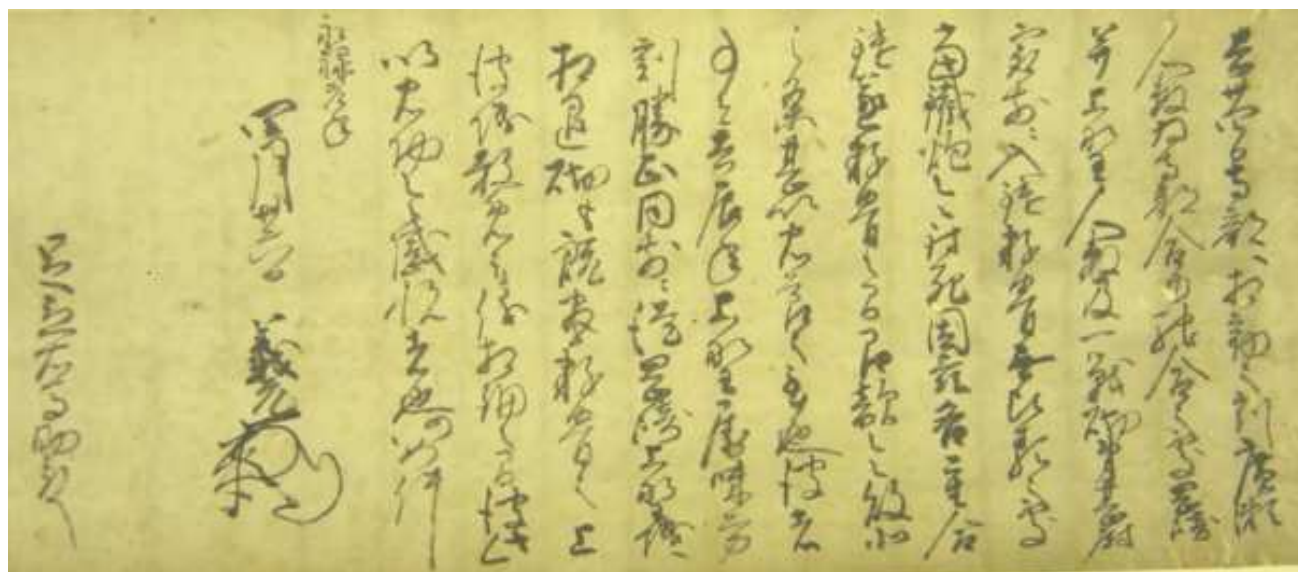


所蔵史料紹介

今川義元感状



「今川義元感状」(個人蔵)

(読み)

去廿四日寺部へ相動之刻、広瀬
人数為寺部合力馳合之處、岡崎
并上野人数及一戦砌、弟甚尉
最前二入鎧、粉骨無比類之處、
當鐵炮令討死、因茲各重合
鎧、遂粉骨之間、即敵令敗北
之条、甚以忠節之至也、彼者
事者、去辰年上野属味方
刻、勝正同前二從岡崎上野城へ
相退砌も、既盡粉骨之上、
彼城赦免之儀相調之間、彼比
以忠功令感悦者也、仍如件、

永祿元年

四月廿六日 義元(花押)

足立右馬助殿

本文書は、駿河、遠江の戦国大名で著名な今川義元が発給した文書です。平成16年11月に日立市の綿引正純氏から当館史料部に寄託されました。「静岡県史資料編7中世三」には採録されておらず、新出史料です。宛先の足立右馬助の子孫は近世には幕臣(御家人、二百俵取)となり、「寛政重修諸家譜」の足立氏の頃には、「今川義元より其忠功を賞して兄(右馬助)がもとに感状を与へらる」と、本文書の存在を記しています。寛政年間までは同家に保存されていたことが分かります。しかし以後同家から流失したようで、明治期に入って東京神田の古美術商に収集され、昭和38年頃に綿引家に移りました。本館に寄託されることで、日の目を見た文書といえます。

本文書の料紙は楮紙で、現状は横切紙で掛軸装されています。文書の法量は縦 16.5 cm、横 39.7 cmを測ります。花押の形状は同時期の義元花押と同一で、本文書は原本と見做してよいものです。

戦国時代の新出文書、それも大名の発給文書ですから新しい事実を語る可能性が高いのですが、内容を詳細に検討すると、特に注目すべき史実が浮かび上がってきます。

本文書は永禄元年（1558）4月、今川義元が、当時人質にしていた松平元康（後の徳川家康）の家臣足立右馬助に与えた感状です。特に同年2月からの三河寺部城（豊田市寺部）の合戦や、2年前の弘治2年（1556）の同上野城（豊田市上野町藪間）帰属問題での、右馬助の弟甚尉の活躍、そして討死を賞しています。

本文書で何よりも注目されることは、寺部城合戦について記されていることです。寺部城合戦とは、今川家の人質であった徳川家康の初陣として巷間によく知られている合戦です。当時の三河は今川家の支配下にありましたが、隣国尾張の大名織田信長と今川家の対立の焦地でもありました。寺部城合戦は2年後の桶狭間の合戦の前哨戦の一つともいえるものです。この合戦については、大久保忠教の「三河物語」や松平家忠の「家忠日記増補追加」など後日の記録に、同年2月5日に岡崎に戻った家康が、家臣の岡崎衆を率いて、信長方に寝返った寺部城主鈴木日向守重辰を攻め、見事初陣を飾った経緯が記されています。しかしこの合戦に関わる文書は、「譜牒余録」巻四十二に写された松平次郎右衛門宛て今川義元感状写以外には、その存在は知られていませんでした。その点で、本文書が日の目を見たことは貴重なのです。

本文書からはまず、寺部城合戦の終期が判明します。「三河物語」などでは記されず、「譜牒余録」の今川義元感状写では、城主鈴木重辰の再入城など巻き返しがあり、合戦は4月まで継続していたことが判明するのみだったのですが、4月26日付けの本文書では、足立甚尉が討死したことを「去二十四日」とし、「即敵令敗北」しめる結果となったと記しています。ここから寺部城合戦は4月末に今川方（家康勢）の勝利で決着した事実が判明します。また織田信長方に付く「広瀬人数」（広瀬城主三宅高清勢）が鈴木重辰方に加勢したのに対し、家康方では直臣勢の「岡崎人数」の他、「上野人数」（上野城主酒井忠尚の勢力）が加勢した事実も確認できます。

この他、2年前の上野城の帰属問題も新事実です。紙幅の関係から寺部城合戦の様相のみを示しましたが、新しい史料の発見で、このように歴史の新事実が明らかになってくるのです。

歴史館史料部では、このような貴重な史料を含め約17万点の歴史資料を公開しています。

（首席研究員 内山俊身）